
俺は彼女を壊したようだ。

枝切り包丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は彼女を壊したようだ。

【Nコード】

N1026Z

【作者名】

枝切り包丁

【あらすじ】

なんか図々しい神様に転生させられたんだが……今回の人生は諦めよう、
みたいな話。

（なのは重傷事件からスタートです）

0・転生からこれまで、

「悪い、今からお前の人生台無しにする」

私の目の前で、彼はそう口にした。

俺がこの世に生を受けたのはコレが二回目になる。

それは俺、相良紅助が転生者と云うことだ。

ある日俺は死んで神と名乗る人物に出会った。

目の前の人物が自らを神と名乗った瞬間から俺の頭の中では（死亡
「神が間違えて殺した」ごめんなさい変わりに転生させてやる）な
んて式を浮かべていたが自称神は神様の能力で俺の思考を読み一
笑した。

曰わく《神である我が何故貴様のような小さきものに頭を下げねば
ならぬ》

まあ、人生……と言っても既に死んでいたが……そんなものだ
った。

それから神とやらは呆然とする俺を気にせず何やら説明を始めた。

《生まれ直す代わりに私の企画した物語の俳優となれ》

そんなふうに神は言った。

俺としては結局転生モノかよ、みたいな肩透かしを食らったためどうにも言葉にしにくい面持ちのまま首を縦に振った。

そして神が俺に行かせるといった世界が《魔法少女リリカルなのは》の世界だった。

偉そうな喋り方して魔法少女かよ、と文句を浮かべて神に殴られた。

こうして俺は生き返るわけでもなく、生まれ変わるわけでもなく、生まれ直した。

自分の名前も容姿も、両親の名前も容姿も変わらずなかった。

ただ母が元魔法少女で俺も魔法少年候補と言う設定が書き加えられただけだった。

生まれ直してから小学校の三年生になるまではとても平和な日々だった。

ただこの世界の主役である高町なのはと仲が良く母から魔法の教育をされている以外は普通の少年として育った。

生まれ直す前の知識を垂れ流す分けでもなく他人より優れた何かを魅せる分けでもなく。

この人生が神に見られているというだけで俺は今回の人生を諦めたのだ。まあ、次回があるわけでもないが、

そのため高町がPT事件に巻き込まれた時もあまりやる気が出なかった。

無視する、という手もあったのだがユーノのSOS信号を母が傍受してしまったため失敗した。

結果としては高町を全面に押し出しそれをフォローすることになり原作と差ほど変わりのないものだった。

この時点で俺の立ち位置はユーノともう一人誰かがいる、みたいな感じた。

その年の冬、闇の書事件もそんな感じだった。

八神家の小さいのに襲われたのはを守ろうとしたらボコボコにされた上に魔力を吸い取られ気が付けば事件が終わっていた。

辛うじて夜天の書の管制人格、リインフォースだったかを目にすることができた程度で立ち位置はユーノ以下のものだった。

それから数年、俺は高町に金魚の糞のように生きてきた。

魔法関係者の中で母を抜くと最も仲がよく信頼出来る人物だったからだ。

で、俺は消えかかっていた記憶の中からあることを思い出した。

恐らく高町がエースオブエースへと至る大切なイベント、

高町なのはが墜される。

それを思い出したのはとある演習中、

高町が可笑しな形をした敵に襲われるのを見て、だった。

目を覚ますとここが病院だと一目でわかるほど白い天井が見えた。
起きあがろうとして後頭部で枕を叩いた。

両腕が無かった。

まあ、両の腕とも斬り落とされる瞬間を目にしていたのでそれほど驚きは無かった。

どちらかという指の感覚が綺麗に無くなっていることに驚いた。
指がないってこんな感覚なんだ、程度には。
肩の先から少しだけ残った腕でベットをよじ登り何とか上半身を持ち上げた。

高町がいた。

ベットに寄りかかり寝息をたてるそいつを見て思わず苦笑する。

何とか高町だけは守れた。

高町が襲われるのを見た瞬間俺は久しぶりに本気を出したと思う。
高町の前へ飛び出し敵と一瞬にらみ合った。

ここで短い戦闘があつたが割愛。

俺が一方的にやられ

る話なんて話したくない。

両腕を斬り落とされたのに俺は笑っていた。

両腕がないくせに高町を守ることが出来て正直に嬉しかった。

俺にとつて高町が両腕を失つてでも守りたいと思うほど大きな存在
だったということには驚いた。

手がないため足で高町の体を揺する。

若干足蹴にしていりようで少し躊躇ったが仕方ないと割り切った。

「……んっ」

数回揺すると高町は少しだけ呻いて体を起こした。

こちらを見る。

やっぱり高町は俺を見て泣いた。

1・お見舞い

俺が目を覚まして最初に面会に来たのは八神家の小さいことヴィー
ータだった。

彼女はやけに俺を心配していて両腕が無くなったのを見て何とかな
らないのかと医者につっかかっていた。

まあ、切り落とされた両腕の一片でも残っていたらクルーニングで
直せたかもしれないがあの敵の野郎はデバイスを破壊するため俺の
両腕ごと灰にしまった。

勿論灰は風に吹き飛ばされたし短くない付き合いだったデバイスも
修復不可能なほどに破壊されたそう。

ヴィータは医師の説得に半泣きになりながら頷いていた。

彼女が泣くなんて初めて見たのでその原因である俺は何だが肩身が
狭いような気分だった。

次に来たのがフェイト、フェイト・T・ハラオウンだった。

彼女は病室に入るなり俺と高町を見てなんと声をかけたらいいのか
分からなくなったのか口をパクパクと開閉していた。

その困った様子が彼女らしく苦笑するとそれに彼女は安心したらし
く「大丈夫？」と控えめな声で聞いてきた。

大丈夫なわけないだろ？なんてテストロツサをからかってやると怒
り出して病室から出て行ってしまった。

不謹慎だったのか？

で、次が八神家。

何だか闇の書のことを思い出して入ってきた瞬間笑ってしまったらシグナムさんに怒られた。

闇の書のとくと違ったのはヴィータが先に来ていなかったこととリインフォースがいなかったことだ。

彼女にはしっかりとお別れが出来なかったため少し胸が痛む。

八神家の人物はいつも通りバラバラなのにどこか揃って見えた。

シグナムさんは黙ってこちらを見ていてシャルさんは泣きそうなほど心配をしていた。ポチ、もといザフィーラは少し残念そうな顔をしていた。

最後に八神は顔を真っ青にしてこちらを真っ直ぐ見つめていた。

どうも闇の書のことを向こうも思い出しているようだった。

まあ、闇の書の犠牲者に会うのは俺が一番最初だったらしいし軽いトラウマにでもなっていたのだろう。

八神家のみんなはそれぞれ俺を心配していて、それぞれの言葉を残して帰って行った。

次に来るのはユーノかクロノかな、なんて思っていたが二人とも仕事事が忙しらしくしばらくは面会にこれないらしい。

それで結局次に来たのは……

俺と高町の両親だった。

次元世界を渡るのに時間がかかったらしい二組は両極端な表情を浮かべていた。

凄く申し訳のない表情と凄く嬉しそうな表情。

勿論前者が高町の両親で後者が俺の両親だ。

俺の両親は凄くいい笑顔で俺に近づくと「紅助、よくなのはちゃんを守った。よくやったな」なんて肩を叩いていう父と「コウちゃんには私達の誇れる魔法少年よ」なんて笑顔を投げかけた母は高町の両親を置いて病室から出て行った。何しに来たんだあいつ等。

病室の人口が高町家に傾いた今、俺の肩身は酷く狭いものとなっていた。

「すまない」

最初に口に出したのは高町の父、土郎さんだった。

彼は一度頭を下げるとなのはを病室から追い出し俺に話し出した。

内容は酷くあまり纏まったものじゃなかった。

だけど俺はそれを黙って聞いていた。

幾度と無く頭を下げる土郎さんと桃子さんの背中がやけに小さく見えただけからだ。

二人は謝るだけ謝って俺に背を向けた。

言うだけ言って帰るってなんかずるい、なんて思っていると扉の前で桃子さんが振り返った。

「なのはを助けてくれて、ありがとう」

その一言で何故か笑みが止まらなくなった。

次に扉を開いたのは戻ってきた高町だった。
高町は瞳にまだ涙を溜めたまま俺を見つめる。

「…私、コウ君とお話したい」

俺はあまりしたくないなあ……

2・決壊（前書き）

ナゼコウナッタ…

一応ここまでかプロローグです。
若干のヤンデレ臭に注意！

2・決壊

「は、話は後にしないか？」

目覚めた時の第一声がそれだった。

泣き出してお話がしたいと喚く高町に俺はそう言って逃げた。

目覚めたばかりだし、とかいろいろない訳を考えて先延ばしにした結果…

「…お父さんとも、お母さんとも話して、やっぱりっ、私が、お話すべきって、そう、思ったっ」

途切れ途切れで、涙をこぼしながら高町なのはは言った。

「私は、高町なのはは、コウ君とお話したいんだって！」

なんというか…

俺の負けだった。

「それで、何を話す？」

仕方なく首を縦に振った俺はもう開き直って高町の目を見つめ返す。

「なんで、あんなことしたの…？」

そこからかよ、といったかんじだな。いや、別にいいんだが。

「別、理由はない。と思う…」

「え？」

俺の答えに高町は首を傾げた。

「気が付いたら飛び出してた、というか…お前が襲われるところを見たところまではちゃんと覚えてるけど」

「そ、そんなので私、納得できない!」

だよな。

腕があれば腕を組むのだが残念ながら腕が無いので俺は天井を見て考える。

「一つは心配だったから、かな」

「心配…？」

「最近お前の体調が優れてなかった。疲れも溜まってきた」

「そんなっ」

「ことあるよな?」

俺の言葉に高町は口を閉じて俯く。

「言っても聞かないと思ったから言わなかったけどさ、無理してた
だろ、お前?」

びくりと高町の肩が震える。

わかりやすい過ぎるだろ...こいつ。

「好きな事を続けるのはいいけどほどほどにしとくのが一番だと思
うよ、俺は。まあ、最初からこう言わなかった俺も悪いんだけどな」

「そ、そんなことっ」

「はい、次二つ目!」

「ま、まって!」

待たない、と高町の声を見捨てて話を進める。

「二つ目は後ろめたい気持ちがあったから」

やっぱり首を傾げた高町を見て苦笑する。今日は何回苦笑すればいいんだ。

「俺はずっと高町に頼ってたから」

「私、に?」

「そう、お前が魔法を知った頃からだ。ジュエルシードを探すのもフェイトと和解すること、全部お前に任せてた。俺は面倒臭がりだから《高町に付いていけば損はしない》なんて考えてたんだよ。多分闇の書の時もそう俺がもし倒れ無かったとしてもお前の言葉にただ頷いていただけだと思う」

おそらくコレが鍵だったのだろう。

こんな事を言わなければ良かったなんて、後になって後悔した。

「違う！」

突然高町が吠えた。

「違うよ！違うもん！コウ君はそんなんじゃないもん！」

「そのコウ君自身が言った言葉なんだが…」

涙を振りまきながら首を振るう高町はこれでもかってくらい大きく口を開いて叫んだ。

「頼ってたのは私だよ！！」

突然のことに驚いた。

頼っていたのは完全に俺のほうだと思ってたから。

「小さい頃に隣にいてくれたのはコウ君だったよ！フェイトちゃんと分かり合え無いときに隣にいてくれたのはコウ君だったよ！ヴィーちゃんに襲われた時守ってくれたのはコウ君だったよ！魔法のことを皆に話すとき手伝ってくれたのはコウ君だったよ！」

高町は俺の事を少なからず重荷だと思っていると、なんて思っていた。

だから一つ一つ高町が叫ぶ度に頬が熱くなる。

「今度も助けてくれたのはコウ君だったよ！！」

最後にそう言っただ町は大きく息をついた。
俺はというと多分茹で蛸みたいになっている。

「コウ君は、私のことをまだ名前ですべないくらい恥ずかしがり屋で全然声に出して言ってくれないけど私、わかってるよ…私の為につて隣にいてくれること。でも！だからこそ私はコウ君にそんな事してほしく無かった！」

高町が俺を見る。

おそらくその目は俺が無くした両腕を見ていた。

「ずっとコウ君に何かしてあげたいって思ってた！私みたいに寂しい時に！悩んだ時に！苦しい時に！不安な時に！コウ君みたいに隣

にいて、助けてあげて、一言で背中を押してあげたかった！」

両腕を広げ高町は叫んだ。

「なのに、なのにこんなのってないよ！どうすればいいの！私の腕がコウ君のものになるなら今すぐ切り落としてもいい！コウ君が自分の両腕をそんな風にした犯人が許せないって言うなら探し出して同じように両腕を切り落としてやりたい！だけど、コウ君が言いたいのはそういうのじゃないってわかってる！コウ君なら笑って許してくれるてわかってる！」

だけど！！

「今コウ君に笑って許されたら、私が私じゃなくなっちゃうの！私は私を許せなくなるしコウ君から離れられなくなるの！私はコウ君の隣にいられる私でいたい！でも私はどうすればいいの？もう何をすればいいのか、何を伝えればいいのかわからないの、ねえコウ君」

高町はそのまま泣き崩れた。

「わかんない、わかんないよコウ君」

虚しく床を掻く高町の指を見てふと友人の言葉を思い出した。

《世界いつだってこんなはずじゃないことばかりだ》

俺はそんな現実には立ち向かえないかもしれない。

こうして、

俺は彼女を壊したようだ。

3・回想

目を覚ますとここが、というのは二度ネタなので置いておいて久しぶりに寝た実家のベッドは相変わらずどんなベッドより眠りやすかった。

あれから少しして・・・と言ってもそるなりに日にちはたっている
・・・俺は退院し実家に戻る事になった。

腕のこと以外は治療魔法でこと足りたのでそれほど入院期間は長くなかった。

ベットから立ち上がる。

近くに置いてあった二本の長方形の筒に腕を突っ込む。

長かったと言えばこれだ。

腕から魔力を流し込むとそれは吸い付くように俺の腕にくっついた。
ゆっくりと両腕を引き抜く。

と、そこには無くなったはずの両腕がすらりと伸びていた。

確認するように両手の指を動かす。

で、先にネタ明かしをすると、これは義手型簡易デバイスの一種だ。
魔力を神経の代わりに操って指などを操作できる。

待機状態ではただの腕の機械だがセットアップするとその人物に合

わせた肌の色のバリアジャケットをデバイス自体に展開して見た目は人の腕そっくりにできる。

欠点と言えば触感が堅く冷たいことと操作が難しいことだ。

退院するまでの間出来るだけ操作になれようとしたが今でも完全に操作が出来るわけではない。

まあ、そのあたりは馴れらしいのだが、

部屋を出てリビングに入ると母が朝食を準備していた。

ふと見渡して新聞を読む父を見つけたが残りの一人が見つからずため息を吐いた。

「コウちゃん、起こしてきて」

「…わかった。あとコウちゃんはそろそろ」

「じゃあ、お願いね。コウちゃん」

「……はいはい」

母の言葉に不承不承といった感じで頷くと俺は踵を返す。

階段を登り直して俺の自室の隣にある部屋の前で立ち止まる。

母が用意したやけにファンシーな表札に顔を歪めつつドアをノックする。

返事は、無い。

「入るぞ」と念のため口にしてドアを開いた。

案の定そいつ、高町なのはは静かな寝息をたてながら眠っていた。

ここで何故高町が俺の家にいるかというところ、それは俺がまだ入院中の時に遡る。

「え、管理局を止める？」

呆然、俺がその話を時の高町を表す言葉がそるだった。

「うん、これを機会につて訳じゃないけどそろそろお前についていくのをやめようと思って」

その言葉を聞いて高町の瞳が揺れるのが見えた。

「じゃ、じゃあ私もっ」

「止めるっていうのは無しだ」

「なんで!？」

身を乗り出す高町の額にこちらの額をぶつけて目を見つめる。

「お前は魔法が好きで、その魔法で誰かを助けたいんだろ？だったら今のお前どれだけ恵まれた環境にいるかわかるだろ？」

「でも、私が守りたいのはっ」

「俺、なんて言っなよ?」

「え」

「男として、つてのもある。それに俺が決めた事なんだお前から卒業するって」

「でも、私は」

ここまで言っても食い下がる高町に額を一度ぶつける。

「迷ったら誰かに相談しろよ、俺以外にもいるだろ?そういうのを聞いてくる友達が」

「友達?」

高町は揺れる瞳で聞き返す。

「テストロッサなら喜んで聞いてくれるだろうし八神だってそうだろう? ユーノやクロノでもいい、そっぴやヴィータもそうだアイツはアナでもかなりの友達思いだからな。見舞いに来たのはお前に次いでアイツが二位だし」

「ヴィータちゃんはどこから見ても友達思いのいい子だよ」

「そうか?」

クスリと笑った高町を見て少し安心する。

これならどうにかなるだろうと、その時は思っていた。

その時は、

次に高町が表れたのはテストロッサを連れてだった。

「勝負？」

「勝負をしよう」そうテストロッサをつれた高町は言った。
あえて言おう、

なぜそうなった？

高町は言う。

「勝負をして私が勝ったら私はコウ君に付いていく、コウ君が勝ったら付いていかない」

馬鹿げている、俺に徳がない、いくら抗議しても高町は勝負は絶対に行くと言って聞かなかった。

やけになった俺はその勝負に乗り数人に怒られる事になった。

最初は八神、なんで勝負に乗ったのか！なんて怒られて仕方なく
んて答えてしまった俺は殴られた。

次はテストロッサをのぞくハラウン家の面々だった。

絶対勝てと、高町は巨大な宝石の原石だなんていうリンディさんに
わかってますよと軽く答えるとじゃあ勝負になんてのるんじゃない
とクロノに殴られた。

どうやら高町側の味方はテストロッサとユーノ、アルフにヴィータ
とシャマルさん、ついでに地球の高町一家、バニングス一家、月村
一家までいて何故か俺の両親も高町側だった。

こちらの味方は八神にクロノとリンディさん。

他のやつは傍観に徹した。

これはねえよ、四人で頭を抱えた。

何で勝負するのは俺の専属看護師に決めてもらう事になった。

で、出てきたのが義手型簡易デバイスだ。

こいつで退院までに割り箸を綺麗に使えるようになれば俺の勝ち、
できなければ高町の勝ち。

まあ、ここから先の展開はわかると思うが…
努力はしたのである。

高町勢力が面会という妨害をしてくるなかで少ない時間をそれだけに費やした。

面倒臭がりの俺がそんなことをしたのは高町のためだったし何より休んでいたら俺の味方が怒るからだ。

リンディさんから紹介された俺と同じく両腕を失い義手型簡易デバイスを使用している人物にもあった。

馴れるしかないなんて言いやがったソイツに腕があったら俺は殴つてやりたいと思った。

何度も割り箸を真つ二つにして何度も割り箸を爆散させた。

後に聞いた話だがその義手は魔力が強いほど握力が強くなったりしてしまい操作が難しくなるらしい。

俺の魔力は高町と同等位なので酷く難しいはずらしい。

で、退院の日。

俺はみんなの前で割り箸を爆散させた。

俺の味方から有り難い拳をもらい病院へ逆戻りする事になった。

その後高町は俺と一緒に管理局をやめることになったがリンディさんや八神の必死の説得により高町は囑託魔導師としてなら管理局に協力する事を承諾した。

なんとか再入院を防いだ俺だったがそこで高町はさらなる爆弾を投げ込んだ。

「今日からコウ君のお世話は私がするね」

一瞬意味がわからずポカンと高町を見つめた。

「お父さんとお母さんに話して、決めたんだ。コウ君の家でお世話すること、もちろんコウ君のお母さんたちにも話したよ？コウ君の部屋の隣の部屋が私の部屋なんだって」

……？

いつの間にか隣に立っていたテストロッサを見る。

満面の笑みで返された。

反対に立っていたヴィータを見る。

何故か睨まれた。

いやいやいや、

それは、無しだろ。

…こうして、高町は俺の家に住むことになったようだ。

3・回想（後書き）

途中までは真面目に書いていたんですが…

あれ？

4・親友

退院のさいの出来事を思い出して思わず頭を掻く。別に高町が全部悪いってわけでもないだろうし…

高町が横になっているベッドを軽く蹴る。

「……んう」

軽く呻くと高町は体をくねらせた。

それがどこか赤子のようで俺はゆっくりと高町の頭を撫でた。

「コウ、君？」

薄く目を開いた高町は微笑むようにそれを細めた。

「暖かい」

両手で俺の手を押さえつけるようにして言う高町。

「嘘付くなよ」

軽く高町の頭をこずく。

俺の手が、腕が暖かいはずがない。

「私には暖かいんだよ？」

少しむくれて見せた高町にため息を吐く。

「それは幻覚だ。誰かが幻覚魔法を使ってる可能性があるから後から調べるといい、お前の頭とかな」

「酷い」と高町が文句を言う。

「酷いさ」なんて軽く返して高町の手をとる。

「もう朝食だって、俺の世話係りが俺より後に起きるなよな」

ま、無理だろうが。と心の中で呟く。

どうやら高町はその呟きを詠んだらしく頬を膨らませた。
気にせず手を引こうとした俺を高町が止める。

「まだ重いものは持てないでしょ？」

「お前は軽いだろ？」

「ありがとう。でも、いい」

俺の手を離れた高町はベッドの上を跳ねるようにして立ち上がった。
若干よろけたのを支えてやって二人で笑みを浮かべた。

「さ、早く行こう？」

「それは俺の台詞だ」

笑い合って、一緒に部屋を出た。

「なのはちゃん、今日の予定は？」

朝食の途中母が高町に訪ねた。

「あ、今日は病院です。早く治さないと仕事もできませんし」

高町の返事に母は少しだけ微笑んだ。

「急ぐのもいいけどあまり焦らないようにね？」

母の言葉に高町はしっかりと頷いた。

高町は今病気を患っている。

それは話によれば精神的なものらしくそのせいで今の高町は一切の魔法が使えない状況にあった。

原因は言わずもがなで俺が両腕の事だ。

入院中に毎日面会にくるものだからおかしいと思ってはいたが高町も高町で病院に通っているとは思わなかった。

勿論そんな状態の高町が囑託魔導師を務められるはずもなく囑託魔導師として働くのは病気が完治してからと言うことになった。

今では週に数回ミッドへ渡り治療を行っている。
魔法を使えない、と言うのは高町にとってとても辛いことなんだろう。

最近の高町は誰かと一緒にいないと不安になることがあると聞いた。実際高町が初めてこの家に来た時、その時はまだ高町が病院に通っている事を知らなかった俺や俺の両親は用事があって出掛けると言った高町を見送りそれぞれの用事で家を出た。

帰ってみると驚いた。

顔を真っ青にした高町が泣き叫んでいたのだから。

それから高町が病院へ向かうさいは送り迎えをする事になった。

勿論、俺が。

俺が入院中の時は桃子さんや土郎さんと一緒に病院に通っていたらしい。

「さ、送っていつてやるよ」

朝食が終わり準備を終えた俺が高町を見る。

まあ、準備と言っても制服に着替えるくらいだが。それでも小学生をしていたりする。

「いつも、ごめんね」

高町が少し萎んだように言う。

軽く額をこすく。

「少しくらい俺にも世話を焼かせろ」

「で、でも」

「早く行くぞ」

高町の後ろに回り込み背中を押す。

申し訳無さそうに俯く高町の顔が見えた。

送り迎えと言っても俺が行くのは病院ではなくハラウン家までだ。そこで高町を誰かに引き渡して俺は学校に行くことになった。今回は何故か八神だった。

顔色が悪い癖にニコニコと笑っているそいつに警戒していると八神の服のポケットから飛び出した何かに驚かされた。

よく見ると空飛ぶ人形だった。

「リーンフォース？です！」

なんて叫んで変なポーズをとる人形。なんと生きている人形だった。

「やっと昨日完成したんや！」

八神は笑顔でVサイン。

ああ、あのリーンフォースの二号機か、と思いつつそいつを見る。

「はじめまして、こーすけさん！」

「……はじめまして」

ヤケに明るくハキハキと喋るもんだから少しだけこいつがリーンフォースの妹か疑いなくなった。

「あと……テストロツサとかにも言ってるんだが俺はこーすけじゃないってこーすけだ。人の名前を間違えるのは失礼だぞ」

「はわわ。すいません、こーすけさん！」

慌てて頭を下げるそいつに「よろしい」と頭を撫でる。

途端に笑顔になるんだから安上がりなやつだ。

リーンフォース？は若干頭が緩い子と覚えて高町を八神に頼む。

「じゃあ、気をつけてな」

「うん」

「終わったら連絡しろよ？」

「わかったよ」

「ハンカチとティッシュは持ってるな？」

「持ってるよ」

こつんと高町と俺の額を合わせる。

「じゃあ、いってらっしゃい」

「いってきます。コウ君もいってらっしゃい」

「いってきます」

ゆつくりと額を離して俺は学校に向かった。

放課後まだ高町からの連絡が無いことに今日は長いなんて思いつつ帰ろうとしたとき呼び止められた。

「そこの紅いの、待ちなさい」

「赤くはないが待ってやるよ」

振り返ると思った通りバニングス、アリサ・バニングスだった。

「バニングスか。朝に言った通り高町は通院中でテストロッサと八神は仕事だ」

「わかってるわよ。私はあんたに話があるのよ」

「俺に？」

「何よ、私とは話したくないの?」

相変わらずの高圧的な態度に笑みを浮かべる。

何だかんだいってこいつだけが見舞いに来ても何時もと態度が変わらなかった。

久しぶりに持つべきものは友なんて思わされることになったのはまだ記憶に新しい。

そのまま俺はバニングスの家まで引つ張られるように連れて行かれた。

移動に使用したのはバニングス家の車、行きはバスの癖に気分を変えるなよな。

バニングス家に迎えられるとケーキと紅茶が出され向かい合う形でバニングスと話す。

「で、バニングスは俺になんのようなうがあるんだ?」

「んー、まず一つ目」

バニングスは指を一本立てるとにこりと笑った。

「そろそろバニングスって呼ぶの止めない?」

「ん?何だよそれ?」

「言ったまんまだけど、短い付き合いでもないし変じゃない?」

「変じゃないし今更だろ」

俺の答えにバニングスは腕を組んだ。
何を考えてるんだよ。

「じゃあ、バニングスってのが可愛くないから、やめて」

「じゃあって何だよ？」

「バニングスってなんか敵つのような感じがするのよね。私も女なんだからもう少し可愛い呼ばれ方がいい」

話を聞けよ。

それからバニングスはアレコレと理由を考えては俺に投げかけた。

「じゃあ名前で呼んで欲しいから」

「えらく直球だな。 92点」

「惜しいっ！」

バニングスが悔しそうに拳をふった。
まて、流れがおかしいぞ？

「んん、点数制は止めて原点に戻ろう。なんでそんなに名前で呼んで欲しいんだよ？」

「特に意味は、」

「正直に言う」

「もう！」

割り込んだ俺にバニングスが睨みをきかせる。

「べ、別にっ！私だけ名前で呼んでるのが気に食わなかっただけよ！」

「意地っ張り」

「うるさい！」

頬を朱に染めて顔を逸らすアリサに思わず頬が緩んだ。

「今回だけだからな」

「え？」

「で話の二つ目はなんだよ、アリサ？」

「な、あ、う…」

「顔が赤いぞ」

「あ、あんたこそ！」

うるさい。自覚はしている。

自分が度を超えてうぶなことくらいは。

「で、二つ目は？」

「ちょ、ちょっとだけ待って。新鮮といつかなんといつか…少しだけ慣れさせて!」

「…ああ、アリサ。わかったよ、アリサ。少し待つ、アリサ。アリサアリサアリサ」

「あ、あんたってやつは!」

殴られた。

「さ、話を続けようか」

「いきなりテンションが下がるのね」

「お前はまだ赤いのな」

「少しは黙れ!」

「な、殴るなよ!」

二度振るわれた拳をよける。
何でも力で解決するのはよくないだろ。

「二つ目を言うからあんたは少し黙る!」

「了解」

アリサの言葉に頷くと彼女は一度深呼吸をして場の空気を入れ替えた。

「最近、なのはの様子が変わる」

思わず笑みを崩しかけた。

「変わって言うのは？」

「雰囲気というか、勘？」

「…俺が考えていたのより適当だな」

「否定はしない、ね」

ゆっくりと笑みを作るアリサ。

「嘘をつかない。私が紅助の好きなところ」

「それはどうも」

笑顔で返すとアリサは机に投げ出していた俺の腕を撫でる。

「原因はコレ？」

「まあ、そうかな？」

「曖昧なんだ？」

「腕も、というか俺自身かな」

笑う、もうそれしか選べる表情がなかった。

「俺が高町離れをするって話だったんだけど」

「ああ。なのはが離れてくれない、でしょ？」

「……さすが天才」

「天才じゃないわよ、頭が良いだけ」

「はは、かっこいいじゃん」

でしょ？と言ってアリサは紅茶に口をつけた。

「なのはって紅助にべったりだったもの。見ていて恥ずかしかったくらい」

「わかってたなら言ってくれよ。元々俺が頼ってるつもりだったんだよ高町の事を考えてなかった」

「それでもなのはに懐かれるんだからあんたは凄い」

「懐くってペットじゃあるまいし」

「なのははそれくらいでいいのよ。そのほうがなのはのためになる」

「まあ、俺のようにはならなかっただろうな」

そりゃそうだ、と二人して笑う。

何かが剥がれ落ちる感覚がした。

「今気付いて良かったって思うのが一番。共依存なんてそこら辺にいくらでもって転がっているんだもん、時間が解決してくれる」

「やっぱりお前は天才だよ」

「天才じゃないって頭が良いだけなんだから」

やっぱり俺の親友はかつこいい。

ふと携帯が音楽を流した。

見ると高町の名前が表示されている。

「なのは？」

「うん、少し悪い」

いって、とアリサが笑うのを見て電話に出た。

『コウ君？』

「ああ、終わったのか？」

『うん、待たせてごめんね』

「いって、今からそっちに行くよ」

『わかった。本当にごめんね？』

「謝るなつて。それじゃあ、そっちで」

『うん、またね』

ああ、と答えて電話を切った。

アリサを見ると彼女はにっこりと笑う。

「ワンちゃんのお迎えの時間かしら？」

「あいつは犬じゃなくてネコだな。甘えん坊だけど表に出さない」

そうね、と笑ったアリサにつられて笑う。

「それじゃあ俺は行くよ。悪いなあんまりいい話が出来なかった」

「じゃあ次に楽しい話をすればいいじゃない」

「そうだな」

「バイバイ、紅助」

「じゃあな、バニングス」

手を振る俺にバニングスは顔を歪めた。

「最後にあと一回」

「我が儘だな」

「お嬢様だもん」

「じゃあな、アリサ」

手を振る俺にアリサは笑顔で手を振り返した。

どうやら

俺は親友に助けられたようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1026z/>

俺は彼女を壊したようだ。

2011年12月5日21時25分発行